

# 国境を越える 子どもたち

“引揚げ”の親と子の記録

中国・韓国“残留孤児”——  
「帰国」した日本の  
現実は——

善元幸夫  
押村敬子 編著



社会評論社

編著者紹介

善元幸夫（よしもと ゆきお）

一九五〇年、埼玉県に生まれる。

一九七四年、東京学芸大学卒業。

現在、東京都江戸川区立西小学校日本語学級に勤務。

著書『日本語学級の子どもたち』（共著）社会評論社刊、『ほんとはネ、いじめっこじゃないよ』ポプラ社刊、共訳として『有情』李光洙著、高麗書林刊。

押村敬子（おしむら けいこ）

一九四八年、鳥取県に生まれる。

一九七二年、早稲田大学卒業。

現在、実生出版社で月刊『私教育』を編集。

国境を越える子どもたち

“引揚げ”の親と子の記録

一九八六年二月二五月初版第一刷発行

編著者 善元幸夫・押村敬子

発行者 松田健二

発行所 ㈱社会評論社

東京都文京区本郷2-5-10  
電話03(814)3861  
振替 東京7-89969

定価 一五〇〇円

0030-86198-3351

印刷 ㈱大平印刷社  
製本 ㈱東和製本

# 国境を越えち 子どもたち

“引揚げ”の親と子の記録

善元幸夫・押村敬子 編著

社会評論社



## まえがき

東京都江戸川区立葛西小学校に日本語学級があります。中国・韓国から引揚げてきた子どもたちが学ぶ学級です。学校の近くに引揚げ者の寮（常盤寮）があるために引揚げ者の願いがかない、一九七二年に開設され、今年までに二百五十名を越える子どもたちが入学してきました。十二年前、ぼくが日本語学級の教師となつて間もない頃のことです。ぼくは、韓国から引揚げてきたある女の子の手紙と出会いました。

おじさん、おばさん、お元気ですか。私は十一歳になりました。

私は父（韓国にいる）を考えただけでも涙が出ます。

私はちいさかったとき、母（日本人）が病気で病院に入院したので、年をとった父が一人で私たちを育ててくれました。雨がふつて食べるものがなくなると、父はあっちこっちさがしまわり食べものをもつてきてくれました。

他の人がどんなにすかんといつても、私の心はかわりません。涙がとめどなく流れるのも、このような理由があるからです。兄さんは道で新聞売りをしていて、たとえいくらかでも父をたすける決心で、さむい冬も涙を流しながらがんばりました。私たちの家庭は、このように苦勞をしながら生きてきました。

にもかかわらず私たちは、このようにはなればなれになっています。日本は私にとってすばらしいところです。こんなすばらしいところで、父と兄といっしょにくらせないということが、一番悲しいことです。

私は父と母と兄といっしょに、楽しくくらしたいのです。（韓国引揚者会報）一九七〇年

ぼくはこれを読んで大きなショックを受けました。この十一歳の子は、日本人である母と二人だけで日本に引揚げてきました。しかし父と兄は韓国籍であるということと一緒に来ることができないのです。

戦前日本は「日鮮同祖論」をいい、日本と朝鮮は同じ祖先を持つので日本と朝鮮は「内鮮一体」だといって朝鮮人との結婚を国策として奨励し、朝鮮を侵略し植民地としました。しかし戦争が終わり韓国から家族で引揚げようとしたら「夫と息子は韓国籍である」という理由で日本来られずはなればなれになったのです。同じ血のつながった家族と一緒に住むことができず、日本国の身勝手な都合で親子は引き裂かれてしまったのです。

### この悲劇はどこから

このような悲劇はどうして生じたのでしょうか。これはもとをただせば、戦争に原因があります。

一九一〇年日本は朝鮮を植民地にし、一九三一年に、本格的に中国を侵略したのです。神州不滅の日本軍はアジアの盟主になるといいながら人間の考えられるありとあらゆる方法を使つてアジアを焼きつくし、奪いつくし、そして殺しつくしたのです。一九四五年に日本は無条件降伏をしたのですが、そのとき、日本軍は朝鮮や中国にいる多くの日本人を置きざりにしてしまいました。それだけではありません。無敵をほこった関東軍（日本軍）は、敗戦で逃げる途中自分たちの軍の安全のために橋や鉄道を破壊していきました。そのため満蒙開拓民や一般の日本人は逃げ道を失ってしまいました。なかには絶望し集団自決をした人もいたのです。夏がすぎ冬になり零下三十度にもなる旧満州（現在の中国東北地方）の冬がこせず、飢えと寒さと病気で死ぬ人もいました。実に置き去りにされた十三万人もの人が戦争が終つてから死んだのでした。

悲劇は戦争直後の飢えや病気による死で終わりません。その後、日本政府は望郷の念止みがたい日本人を見棄てしまったのでした。戦後数年続いた日本への引揚げは一九五八年ごろまでには帰国の道がほとんど閉ざされてしまったのです。敗戦を中国や朝鮮で迎えた日本人は、日本軍から見棄てられ、戦後長い間日本政府からもう一度見棄てられた人たちでした。この本の第二部に出てくる竹井さんや茂木さん、八木さんたちもその人たちです。当時はみな小学生でした。これらの人たちの一人ひとりの個人の歴史のなかにこのことは、いやしがたい心の傷として残っているのです。

## 日本語学級の子どもたち

それでは、引揚げ者の子どもたちを日本はどのように受け入れたのでしょうか。子どもたちは日本語が全くわかりません。「あいいうえお」からの出発です。

大人はいいいます。「引揚げ者は日本での生活を築くために困難な問題がたくさんある。しかし、子どもたちはことを早くおぼえるから問題はない。子どもたちは異なった環境でもすぐ慣れるよ」

ぼくもはじめそう思い一生懸命日本語を教えました。しかし子どもたちに立ちはだかっている壁はことばだけではありませんでした。中国からきた五年生の女の子はこういいました。

「先生、わたし中国では日本鬼子<sup>ニッポンキイ</sup>！日本鬼子<sup>ニッポンキイ</sup>！っていわれたんだ。でもすぐに友だちになったよ。でもどうして、どうして日本人は私のことを中国人、中国人とっていいじめるの。今でもそうなんだよ。先生そのわけしりたいんだ。どうして日本はそうなの？」

ぼくは以前、葛西小日本語学級から転校していった子どもたちにアンケートをしたことがあります。「中国人帰れ！」といわれた子、石を投げられた子、毎日なぐられていた子ども。実に八割に近い子がいじめられたといっていました。親にとつてのふるさと日本は必ずしも子どもたちにとつてはあたたかいものではありません。ある時、日本語学級から普通学級に通級しはじめた子どものことをきいてびっくりしたことがあります。その子は日本語学級では大きな声でみんなを笑わせたりするのですが、普通学級では大きな声がでないのです。この子は自信をなくさせられていたのです。自分の大好きな中国が日本では差別され何かダメでつまらないものと考えられているからです。子どもたちはどうしたら自分に対して自信をもつことができるのでしょうか。ぼくはことばを覚えるだけではだめだということに気がつきました。子どもの悩みにこたえられるような授業、子どもの魂にふれるような出会いが必要だと思いました。日本にきてから家族のことで悩み、家出をくりかえしていた韓国からきた六年生の女の子は二月の寒い日、三度目の家出の後こんな詩を作り曲をつけました。

そよそよ風が知らせます

あなたの春がきますと

ねえ そよ風よ

きくけれど

私の春はいつくるの

悲しみのなかから自らを訴えるようにして作ったこの歌には朝鮮独特のメロディがあり、人の心をうつものがあります。ここには朝鮮の心があるのです。

子どもたちが生まれ育った文化を大切に、それを日本で生かすことはできないだろうか。そして、その子どもたちのふるさとが、日本で生きていく大切な根つこになってくれればいい。そんなことを考えました。子どもたちがこれからどう生きるかを考えるときに大切なことがもう一つあります。それは親の問題です。子どもたちは、日本にきて言葉も仕事もできない親、戦争で中国・朝鮮に行ったことを考えると親がみじめにみえてくることがあります。どんな人間もその時代の歴史と無関係に生きることではできません。ぼくは子どもたちが親のことも避けて通るのではなくあるがままの姿をみる必要だと思えます。そこには引揚げの親たち一人ひとりの苦しみや悩みがあるのです。それを子どもたちが理解しようとした時、この世に一人しかない親のおもいがみえてくるでしょう。引揚げ者の一人ひとりの歴史は敗戦を外国で迎えた人たちだけがもつ、固有の苦しみです。そこには生の葛藤があるのです。そして苦しみ生きぬいてきた人間のやさしさを学びとることができます。それがみえてきた時期の生きざまは子どもに限りない勇氣と可能を与えてくれます。

ここに収録した親と子の二代の記録には引揚げてきた親とその子どもとが重なり合う部分が多くあります。この本で引揚げの子どもたちの現実を深く知ってもらいたいと同時に、「祖国とは何か」「日本国は何か」ということもあわせて考えてもらえればうれしいと思います。

## 第Ⅰ部

### 日本を生きる

### 子どもたち



#### 1 語りはじめる子どもたち

- 1 閉ざされている国Ⅱ日本
- 2 わたしのこと

#### 2 存在の根つ子を考える

- 1 ふるさと
- 2 ふるさをかくす
- 3 わたしの親
- 4 中国 韓国そして日本
- 5 ばくが日本人になる
- 6 中国と韓国と日本人の差別がなくなる日
- 7 民族に目覚める

#### 3 中国・韓国との出会い

- 1 魂にふれる音楽会
- 2 「陶俑の美」は引揚げの子に何を語るのか
- 3 「餃子」の学習をして
- 4 学芸会「しばてん」

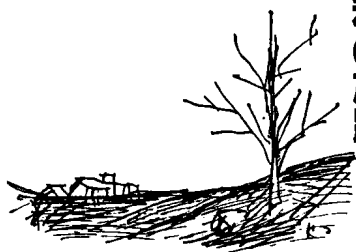
#### 4 ロンシンとヨウジンの選んだ道

- 1 ロンシンと父との出会いを求めて
- 2 だれもが共に泣いて、笑えないものか



## 第2部

### 我が子に伝えたい 私の旅路



手記をまとめて 249

あとがき 251

- |            |            |             |             |               |
|------------|------------|-------------|-------------|---------------|
| 5          | 4          | 3           | 2           | 1             |
| 私が中国籍を捨てる日 | 夫が日本人だと知つて | 三十四年めの父との再会 | 過酷な運命を生きぬいて | 「赤い靴」の唄をうたうとき |
| ——王吉英      | ——李春芳      | ——八木功       | ——茂木春江      | ——竹井澄子        |



## 第1部

# 日本を生きる 子どもたち



## 第1章 語りは始める子どもたち

中国から秋田県に「引揚げ」てきた男の子がいました。その子は一年たつて葛西小学校の日本語学級に転校してきました。その子はなぜかいつも帽子をかぶったままでした。

「バカヤロウ、ブッコロシテヤル！」

その子をはじめて日本語学級の子どもとかわした「ことば」でした。

やがてみんなと親しくなったある日、その子はみんなの前で帽子をぬぎました。その子の頭のまん中は髪がぬけてないのです。それは「円形脱毛症」といって、急に心が不安になったり、神経を使いすぎたりする人は髪が一時的にぬけるというのです。それがその子の全てを物語っていました。「日本にきてから、ずいぶんいじめられた」。母親がそういいました。だからその子は自分がやられる前にやつつけてやるといいます。ある日、「どうしてそんなこと言うの？」と聞きました。彼は二時間もじっと考えて書きました。

「自分のことかんがえる。どうして自分わるい、自分のことかんがえる。むずかしい」子どもたちは今、自分のことを語りはじめています。これから、子どもたちの一つひとつの「ことば」にじっくり耳をかたむけていきたいと思っています。



出会いは人を変える。中国に生まれ育った、リイジェンは、これから何に出会えるのだろうか。

# 1 閉ざされた国Ⅱ日本

## いじめられたこと

なんでぼくをいじめるですか

それは中国と日本 せんそうしました

日本まけた

中国かった

だからおまえのせいだといいました

ぼくはこたえました

なんでぼくのせいですか

ぼくはせんそうをしりませんです

ぼくのせいじゃない

ぼくはせんそうがはじまりのとき

ぼくは生まれていませんでした

有<sup>ヨウ</sup>  
君<sup>ジン</sup>  
(十三歳)

引揚げてきた子どもの多くが日本でまず体験すること、それは差別です。有君の母は中国人で、父は日本人です。有君は体の右半身が不自由で、日本にきたときは何歩も歩かないうちにすぐにころびました。中国の歌「東方紅」が大好きな子どもでした。日本の子どもがする差別はやがていじめになります。

## 日本人がこわくなってきたみたい

ホワン ウェン  
黄 文（十二歳）

私は日本に来てから、日本の子どもにたくさんいじめられた。私だけじゃなく、中国からきた人でいじめられた人はたくさんいた。いじめられたとき、どうしていじめめるのかはきかなかったけど、私にできないことで日本人にできることがあるからだと思う。

今でもいじめられるけど、何もいえない。どうしてか自分にもよくわかりません。私は何か日本人がこわくなってきたみたい。私は日本人にいじめられるときは、口ではいえないけど、心ではとてもくやしい。「なにもしていないのにどうしていじめめるの」と心でいつも思っています。

日本語学級の子ども、いじめられたときのおもいはさまざまです。黄文は中国では「文芸宣伝隊」にいました。歌やおどりがじょうずで、勉強がよくでき、小さい子どもの世話が好きな子です。日本語学級ではだれからも好かれる黄文が「日本人がこわい」というのです。

いつかわかる時がある

何<sup>ナニ</sup>偉<sup>エイ</sup>（十一歳）

今日先生がせんばいの黄文の作文をよんでくれました。その時の作文の中に、今の私みたいなこと（いじめられたこと）が書いてありました。作文をきいてから、自分はどう生きていけばいいかと思いました。私はまだ、今それほど考えてはいないけど、いつかこのことをよくわかるようになる時がある。自分はそう信じています。一生けんめいその自分の考えがなるべく早くできるようになるといいなと思います。

黄文の作文をみんなで読みました。その時、普通学級に行ってもなかなかうまくいかない何緯は泣きながらいいました。

「先生、私は中国にいた時みんなが日本鬼子<sup>リイペンクイメ</sup>、日本鬼子<sup>リイペンクイメ</sup>といじめたんだよ。だけどみんなあとで友だちになったよ。でもどうして、どうして日本は私のこと中国人、中国人といっぺいいじめの。今でもそうなんだよ。先生私そのわけしりたいんだ。どうして日本はそうなの？」そのあとでこの作文を書きました。

ぼくのからだはとてもあつかった

貴<sup>グイ</sup>君<sup>ジン</sup>（十一歳）

ぼくはいつもいじめられました。でもいつもぶんなぐってやりたいと思った。けれどそのゆう気がなかった。どうしてかという、みんな大きい人ばかりだったからです。そして次の日あさおきて、



ぼくのからだはとてもあつかった。がつこうへいくとき、ぼくはきょうぶところしてやりたいと思った。

きゅうしよくのときぼくはたくさんたべて、いじめたこどものおなかをぺこぺこにさせて、ころしてやろうと思いました。そして学校から帰るとき、石をいれて雪玉を作つてぶつつけてやろうと思いました。そのとき先生のかおをみたら、とてもやさしいかおをしていたのでかわいそうな気がして何もしないでいえに帰りました。

日本の子どもにいじめられたとき、引揚げてきた子どもは考えます。どうしていじめられるのだろうか。日本人がこわる子もいます。しかえしをしてやりたいと思う子もいます。

しんばいしても もうおそいです

宝<sup>バウ</sup>林<sup>リン</sup>（十三歳）

日本に来て三年生ではじめて新しいクラスに行った時、みんなはなかよくしてくれたけど、だんだんなかよくしなくなりました。ぼくはそのころから人のきもちや人のほんとうのころのことがだんだんわかるようになりました。それからぼくはげんきがなくなっていました。

ぼくは人のこころもわかるようになった。いちばんはじめに、おかあさんのこころがわかって。おかあさんのいつていることをきいて、ぼくはこういう人になった。